

農家の歩き方

～ WWOOF によるファームステイの可能性 ～

農業科 建元喜寿

1972年にイギリスではじまったWWOOFによるファームステイプログラムの内容と、その学校教育における可能性についてまとめた。WWOOFは、有機農業を行っている農家の作業を助け、その報酬として農家から健康に良く美味しい3度の食事と宿泊場所を提供してもらう交換プログラムである。この制度を利用することで、生徒は農業や環境、食の安全性等について多くの経験や知識が得られることを示した。

キーワード：WWOOF、有機農業、ファームステイ、インターンシップ、NPO

はじめに

本稿は、筆者が大学院在籍時代の1998年に、ヤンマー学生懸賞論文に応募し入選した作品に、加筆修正を加えてまとめたものである。原文を活かすため、時代表記などをそのままとしているところがある（説明が必要な箇所は、引用文献等とあわせて最後に注釈をつけた）。また、社会的背景なども当時の状態をもとに執筆しているため、現在の状況と若干異なる記述もある。また、「21世紀の農業への提言」というテーマのため、農業問題への指摘が多くを占めている。

しかし執筆当初から7年が経過した今でも、変わらず社会が抱えている問題、あるいは現在の学校教育における問題を指摘している内容を含んでいると考えている。

以上のことをご理解のうえ、ご覧いただければ幸いである。

この多難な時代に

現在、日本の社会はあらゆる場面で行き詰まっている。経済面では大手銀行への公的資金の導入問題、株価の下落や為替の相場の変化、企業の倒産や失業率の上昇など21世紀を間近に控え、先行きの不透明感はますますさばりである。

農業も同じである。現在の日本の農業は農業従事者の高齢化、後継者難、農産物価格の低迷、耕作地の放棄、自給率の低下など暗い面をあげたらきりが無い。

このように未来に明るい希望を抱きづらいなか、新しい時代を切り開いて行くには、既存の事柄に縛られない若い力が必要である。その若い世代を育成していく教育も完全に行き詰まっている。実体験を伴わない詰め込み式の授業、依然として残る学歴主義、そして物や情報が溢れあらゆるもののつながりが薄れた社会のなかで、自

分の存在がわからなくなり、各地で青少年による犯罪や事件が多発している。

みんなこのままではいけないことはわかっている。しかし、いったいどうすればよいのかわからないのが現状ではないだろうか。

本来、農業とは何か

私は典型的な過疎の村、いわゆる中山間の村の生まれである。私の村の同級生は農村を後にしたものも多い。実家から、あるいは実家の家族と同居はしないが、実家の近くに居をかまえ農業以外の仕事に従事し、農繁期のみしかたなく家業を手伝うものも多い。私の亡父の言葉に「農業は戦争だ。」というのがある。現在では、環境問題や農産物の安全性への意識が高まり、実家周辺でも農薬の散布は減少してきた。しかし、以前は前も見えぬほどに真っ白になりながら農薬を散布していた。毒ガスマスクのようなマスクをし、農薬がかからないように夏でも厚着をしている様子は、さながら戦争のようであった。専業農家はどんどん減少している。兼業で農業をやっている人達も、農業以外の仕事の忙しさと、儲からない農業に疲れ果て希望がもてなくなっている。農村部の人達は、現在の経済至上主義の農業の中に希望を見いだせないでいる。そんな親や祖父母の姿、近所の人達の様子を間近に見ていて、農村の若者が農業を選択しないのはある意味当然といえる。

大学に来て8年目になる。私もそんな農村が嫌で実家から遠くの大学を選んだ。しかし、この8年間、とくにここ数年間の間に、農業に明るい未来を描く、あるいは関心の高い同年代の人達に数多く出会った。新規就農を目指すもの、生まれ故郷の農村の再生を目指すもの、農家出身ではないが自分たちの健康のため食について考え

ているもの、生まれてきた背景や農業へのスタンスはそれぞれ違うが、みなが真剣に自分たちの将来について考えはじめています。

ここで今一度、本来、農業とは何であるかを考える必要がある。広辞苑¹⁾を引いてみると、農業とは「地力を利用して有用な植物を栽培耕作し、また有用な動物を飼育する有機的生産業」とある。現在の農業の問題点は、過度な経済主義や、生産者と消費者、都市と農村、親子などのつながりが喪失してしまったことにあると考えられる。農家の経営の安定化のために、経済性を考えるのは当然である。しかし農業とはそれだけなのだろうか。

以前の農業は人や物などあらゆるものがつながっていた。しかし、戦後の食糧増産の動きの中で、化学肥料や農業など外部からの投入の増大により、日本の農業は大きく変化し、農村の形態も変わってしまった。

本来、農業とは人が生きていくための糧を生み出す有機的な営みで、安全で美味しいものを作り、自分たちや人々を幸せにするものではなかつたらうか。

21世紀は皆が何らかの形で農業に関わる必要がある。そこで本稿では WWOOF による新しい農業の姿を提案したい。WWOOF²⁾ は、Willing Workers On Organic Farm の略で、1972年にイギリスで始まった、有機農業運動を広めるもので、有機農業を行っている農家の作業を一日4～6時間程度助け、その報酬として農家から健康に良くそしておいしい3度の食事と宿泊場所を提供してもらう交換プログラムである。本稿ではまず WWOOF についてまとめる。ついでその事例として私が実際にカナダで体験した WWOOF カナダについて述べる。そして WWOOF を日本に導入した際の利点と問題点をまとめ、21世紀の日本の農業の姿を提言する。

WWOOF とは

WWOOF の歴史と実施国

WWOOF は、1972年にイギリスで始まった。設立当初は、新しい有機農業の動きや WWOOF の理念は、なかなか理解が得られなかった。しかし、その後 WWOOF の真摯な努力や着実な歩みの中で世界各地に WWOOF

が設立され2004年現在、22の国と地域に広がっている(表1)。このなかでもオーストラリア、ニュージーランド、カナダの WWOOF は大変うまく機能しているといわれ、ホームページ³⁾を開設するなど世界に向けて情報の発信を行っている。

表1 WWOOFのある国

国	名
オーストラリア	ハワイ スウェーデン
オーストリア	イタリア スイス
カナダ	日本 トルコ
チェコ共和国	韓国 ウガンダ
デンマーク	メキシコ イギリス
フィンランド	ネパール アメリカ
ガーナ	ニュージーランド
ドイツ	スロベニア

WWOOFでの聞き取り調査およびHPの資料から筆者が作成。国名は通称を用い、アルファベット順で表記した。

WWOOFの理念と運営方法

WWOOF の運営は各国の国情や文化にあわせて運営されている。そのため国によって規模や活動状況は異なっている。しかし WWOOF の共通の理念として、

1. 直接に有機農業の作業を体験し、必要なときはホストの手助けをいつでもする。
2. 田舎の生活や、その国の農業、その国の人々との触れあいを体験する。
3. 化学肥料や毒性の高い農業に頼らない、労働集約的である有機農業の運動を手助けする。
4. 有機農業を通じて多くの人と出会う。
5. 素晴らしい豊かな経験を得る。

などがあげられており、これらの原則に基づいて各国で運営されている。

具体的には、まず WWOOF 体験希望者は訪れてみたい国の WWOOF の会員になる (WWOOF をする人という意味で WWOOFER と呼ばれる)。この際、入会金として国によって異なるが約3000～5000円程度を希望国の WWOOF の事務局に運営費や諸経費として支払う。お金はこのとき必要なだけだ。入会すると WWOOF に登録されている農家 (受け入れ農家を HOST FARM と呼ぶ) の詳しい情報 (事業規模・所在地・家族構成・農場の様子等) が載ったリストが送られてくる (表2)。

表2 ファームリストの一例

On this beautiful, peaceful 4 acres we've created a new home with vegetable gardens, flower beds, natural rock sculptures & much more. Firewood needs to be gathered, pathways made & help needed for various interesting projects. A special "sanctuary" at the back of the land with two small ponds (with goldfish) & a unique flow form water fountain offers a peaceful retreat. A dog & a cat also live with me, plus an occasional teenager! I'm able to provide quality food but if you like to cook I'd be more than be delighted. House-sitting possibilities also, especially in the summer (and winter too). WWOOFers are cordially invited to join me for a busy, fun experience, must be capable of working independently. Nelson (a very special town!) is only 15 min away. I'm always quite busy coordinating WWOOF, so I'd appreciate help of all kinds. If you'd like to learn about WWOOF - most welcome (with computer skills) Not a farm.

WWOOF カナダの資料より抜粋

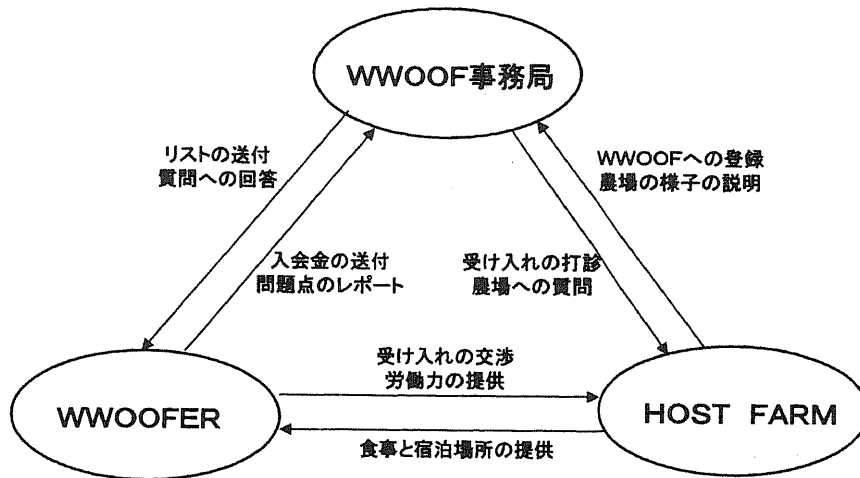


図1 WWOOFの仕組み

WWOOFER は、そのリストの中から自分の好みにあった農家を選び、手紙や電話あるいはE-mailなどによって連絡をとる。そして、農家はその時期に助けを必要としていれば、農場での生活が始まるわけである。

WWOOF の精神として、自主的に自己責任の中で行動をするということがある。WWOOF の事務局自体はリストの送付や新規の受け入れ農家を探すことがおもな仕事である。もちろん WWOOFER からの質問には対応してくれるが、受け入れ先を探すことはリストをもとに本人が行う。受け入れ先とのトラブルを避けるためにも、WWOOF を開始する前に、受け入れ先に心配事は WWOOFER 自身が聞いておく必要がある。また WWOOF では、HOST FARM や WWOOFER からも絶えず意見を聞いており、いろいろな経験や問題点がフィードバックされ WWOOF の運営が向上していくように工夫されている(図1)。

WWOOF の主目的は農業を手助けしながら農家での生活や経験を楽しむということにあり、活動はボランティアベースで行われる。現在注目されているグリーンツーリズム⁴⁾とも共通点はあるが、グリーンツーリズムは森林、海浜、田園そして農家での観光や休養、農村地域住民の就業機会や現金収入を目的とするような点で異なる。また、農作業により収入をあげることが目的ではないため、農場でのアルバイトとも異なる。また比較的気軽に参加できるという点で、各地で行われている後継者や新規就農者の養成コースや研修、農業塾などとも違う独自のものといえる。

WWOOFカナダでの体験

WWOOFカナダの現状

私は1996年にワーキングホリデー制度⁵⁾を利用して、

1年間カナダに滞在した。その間にWWOOFカナダの農場で約1ヶ月間働く機会を得た。WWOOFカナダには、2004年現在カナダ西部から東部にわたり約500軒程度の農家が登録している。私が利用した1996年9月から1997年8月の1年間には、のべ1000人以上の人が参加した。この内訳はカナダ人が47%最も多く、ついで日本人の13%、イギリス、ドイツ人がそれぞれ10%と続き、全部で19カ国の人が参加した(表3)。

WWOOFカナダのリストには、大規模経営の農家から小規模なものまで様々である。なかには、おじいちゃんの話し相手をするのが仕事という農家もある。私は数ある農家の中でも、自分が将来日本で農業を始めたときの参考になるようにと、小規模な農家を選択した。若者の多くは異国の地に大きな希望と夢を描くものである。私も透き通るような青空と、ロッキーの山々、どこまでも続く小麦畑をイメージしカナダの地に大きな夢と希望を持って訪れた。しかし、カナダでも日本と同じように農村の過疎化や農業人口の減少はすすんでいる。例えば私が滞在した農家も60歳前後の夫婦だけで営んでおり、息子は大規模な農家経営にあこがれてアメリカに移住した。このような後継者や労働者の問題を抱えている農家では、毎年入れ替わり訪れる各国のWWOOFER達が重要な労働源になっているところも多い。

表3 WWOOFカナダに参加した人たちの国籍

国名		
オーストラリア	フランス	南アフリカ
オーストリア	ドイツ	スウェーデン
ベルギー	イタリア	スイス
ブルガリア	日本	イギリス
カナダ	韓国	アメリカ
デンマーク	ニュージーランド	
フィンランド	オランダ	

WWOOFカナダでの聞き取り調査や資料をもとに筆者が作成。国名は通称を用い、アルファベット順で表記した。

農場の生活で得たもの

農場に滞在中、家畜の餌やり、堆肥づくり、収穫物の採り入れ、灌漑水路の建設などいろいろなことを手伝ったが、ここでの暮らしでまず素晴らしかったのは、ゴミがほとんどでないということである。農場では牛、鶏、ミツバチを飼育し、飼料用の小麦や牧草、食用の野菜や果樹など数多くのものを栽培している。そしてそれらが結びついていて見事なまでにゴミが出ない。残飯や野菜クズなどは家畜の飼料か堆肥となり、野菜等は畑から直接採ってくるので、ラップや包装紙などのゴミが出ない。現在、日本ではゴミ処理問題やそれに伴うダイオキシンの発生などが大きな問題となっている。ゴミの最終処分場も規模の限界を迎えてきており、ゴミの減量化は急務である。それに対し、この農家での生活はひとつの指針を与えてくれる。

この農家の重要な現金収入に、週末に開かれるローカルファーマーズマーケットがある。これは、近くの農家がそれぞれのものを持ち寄って、合同で朝市を開くものだ。この朝市には近郊の都市住民が多く訪れるため、消費者と生産者がお互い顔見知りであることが多い。消費者は生産者のわかる野菜を買い、また農村の生活や農業についての知識を得ることができる。また、農家にとっても重要な現金収入を得ることができ、また都市の文化を吸収することができる。お互いが潤い非常にいい循環ができあがっているわけだ。

カナダでの野菜の販売と日本での販売で大きく違う点は、日本では野菜を小分けして定量販売することがほとんどであるが、カナダではほとんどがパックされずに山積みされ、消費者が必要な量だけ購入し、グラムあたりで計算して販売されている。こうすると余分な袋がいらぬし、欲しい分だけ買うことができ、余分に買いすぎて腐らすような無駄が省ける。また、一人暮らしで大量には必要でないため買い控えていた人達が、少量ずつ購入することもできる。これは日本でもぜひ実現すべきであろう。

滞在したなかで出会った人の背景は多種多様である。まず、受け入れてくれた農家のご夫婦はドイツからの移民の方であった。また、同時期にWWOOFによって働いていた青年は、将来独立し新規就農を目指す地元のカナディアンであった。メキシコから有機農業を学びにきた大学生とも出会った。また、農場内にある広場でコンサートが行われた際の演奏者はペルーのからきた太鼓演奏者の人で、世界各地を太鼓のコンサートを開催しながら家族でまわっているそうだ。隣町のネイティブアメリ

カンや地元の非農家の人たちが農場によく遊びに来た。わずか1ヶ月の滞在であったが、多くの人と出会うことができた。

みんな楽しく暮らしている

この農場でくらししてみて、とくに印象に残ったのは、みんなが楽しく暮らしていることだ。せっかく植えた苗が雨で流されたり、つらい労働で大変なこともある。日本では笑いを不謹慎とすることがある。もちろん機械や道具を使いながらの作業では、気のゆるみが重大事故を招くことがある。しかし、大変な労働もわいわいみんなできれば結構楽しかったりもする。一緒に働いていたカナディアンが僕がつまらそうにしていたら、いきなりリンゴの木に登り「Apple Break」といってリンゴを採ってくれた。畑でもぎたてのリンゴをかじりながらアップルブレックなんてしゃれているのではないかな。

ここでは近くの人たちが助け合いながら生活をしている。日本ではここ数十年の経済成長の中で農村でも共同体的な関係は崩れてしまった。村社会はお互いが助け合ういい面もあるが、時として窮屈でもある。しかし、滞在した農家の周りには窮屈さがないのだ。お互いのプライバシーを守りながら困ったときには助け合う緩やかな連帯なのだ。これが目指すべき共同体のあり方かも知れない。

日本への WWOOF 導入の利点と問題点 農業における利点

WWOOF を日本に導入した場合に考えられる利点として、まず比較的簡単に直接農業体験ができることがあげられる。環境問題への意識の高まりの中、特に都市住民のなかには自然にふれあう機会や、田舎での農業体験を求めている人が急増している。

現在でも、各地で農業体験コースや新規参入者研修を受け入れるところ、あるいは自治体や農協などで後継者づくりを目指し、新規参入者を募集あるいは金銭的支援をしているところもある。また全国の農業塾をまとめたもの⁶⁾や、全国有機農業者マップ⁷⁾のように全国の有機農家をまとめたものも発行されているが、あまり一般的でない。新規就農には決断や時間、資金などが必要になる。また、いきなり憧れだけなどで農業を始めてしまった後、やはり自分に農業はあわないと思っても、多額の資金を投入した後では、取り返しのつかないことになってしまう場合もある。WWOOFであれば、気軽に自分が気に入った地域で農家の手助けをしながら農

業が学べ、またインターンシップとしての効果も期待できる。

農家としては、労働力が得られるという利点がある。現在日本で最も離農が進んでいるのは、中山間地域であろう。そこでは、労働力は必要であるがアルバイトなどで人を雇うほどではないというところも多い。農業は労働の季節集約性が高い場合があるので、継続的な雇用が難しい点もある。特にそのようなところでは WWOOF のリストに受け入れ可能期間を明示し、WWOOFER により労働力を確保するのも良いであろう。もちろん WWOOFER の多くは農業のプロフェッショナルではないので、労働力の質は必ずしも良くないが、重要な労働力となるのは間違いないだろう。

また都市と農村のつながりを取り戻すことができるという利点がある。お店で売られている農産物から、それがどこからどのようにしてきたかを想像することは難しい。WWOOF による農業体験は都市で育った若者にも、農村や農業の漠然としたイメージを実体験させる良い機会となり、相互理解が深まる。

私の友人が北海道の農家に住み込みでアルバイトをし、いつのまにかその人と結婚した。農村は嫁不足に困っているところもあるが、WWOOF で交流が広がり、私の友人のようなパターンが多くなれば、後継者不足の解決にも貢献できる。

農村と農村の交流を図るという利点もある。WWOOF に参加するのは都市住民だけとは限らない。農家が農家を訪れることによりお互いの技術交流や、文化の交流を図ることができる。

教育面での効果

東京農業大学の初代学長である横井時敬氏の言葉に「農学栄えて農業滅ぶ。」というのがある。現在の大学での研究は、農業の現場と非常にかけ離れてしまっている場合も少なくない。自分の研究が本当に農業の将来に役に立っているのかと、疑問に感じながら研究を行っている学生も多い。そこで研究即実践、実践即研究の場として WWOOF の農家に滞在しながら研究を行い、卒業研究等を行うことも大きな可能性を秘めていると考えられる。お金はないが時間とパワーはあるという学生も多い。そこでお金のあまりかからない WWOOF はぴったりである。学生は、実際の農家での研究が可能となるし、農家のほうも大学の研究の内容等を知ることができる。

高校生の修学旅行や夏の実習、あるいは職場体験のひとつとして利用するのもいいだろう。修学旅行のスタイ

ルは通常、同学年が同じ場所に行く。それは安全性や教員の配置などで仕方がない面もある。しかし、なにもみんなが同じところに行かなくても良いのではないだろうか。希望者をつのり、WWOOF のリストの中からそれぞれが好みの農家を選び、自分で農家とのコンタクトをとる。そしてそこまでの交通手段を自ら調べ選択し手配をする。そしてそこでファームステイをするというのもおもしろい。農家には実体験の場がある。そんななかから自らが学ぶ意欲を持った若者がうまればはしないだろうか。

現在、小学校や中学校の教員免許取得希望者には、1週間の介護体験等のボランティアが義務づけられている。介護を体験することは非常に重要であるが、ボランティアには自発的という意味があるので、強制することに異議を唱える意見もある。次代を担う子供を教育する教員に、食糧を生産する農業について考えてもらうことは非常に重要であると考えている。そこで、ボランティアの選択肢のひとつに農業体験を入れてはどうだろうか。選択肢を増やせば、教員免許取得者への強制感も和らぐ。WWOOF はボランティアペースで行われているので有効な選択肢のひとつになりうるだろう。

さらに国際理解教育の面でも大きな効果がある。日本人、とくに農村部の人たちには依然として排他性が残っているとされている。島国であるために外国を意識することが少なく、外国の人たちとの交流が不得手な人も多い。これは、農村部の人たちが他者に冷酷ということの意味するのではない。ただ他国あるいは他の地域の人たちとの交流経験が少ないだけで、ひとたび交流が深まればとても親身になってくれる。そこで、何人かの人が起点となり WWOOF によって海外の人たちを受け入れることができれば、国際交流がはじまり、相互理解が深まるであろう。

導入における問題点

まず、大きな問題となるのは、WWOOF の全国組織を作る際に誰が中心となるかということである。国や地方自治体、あるいは農協などが中心となる方法、民間の企業が中心となるもの、NPO のように農民のなかから草の根的に広がっていく場合などが考えられる。各国の WWOOF の場合は、NPO として始まる場合が多い。いろいろな組織とのしがらみのない人が中心となることが WWOOF の健全性を高めるために必要であると思う。しかし、組織の立ち上げには大変な時間や設立者のパワーが必要となる。国や地方自治体、全国組織を持った農

協や民間の農業関連メーカーなどが何らかのサポートをすれば大きな力となるであろう。WWOOFによって多くの人たちが農業を体験することになれば、農業全体の底上げや理解につながり、農業関係者にとっても利点は多いと考えられる。

次に問題となるのは、受け入れ農家を探すことと農家の基準である。農家としては、労働面において得るものがあったとしても、部屋を提供し見ず知らずの人を受け入れるのは大変な部分もある。ましてや言葉や文化の違う外国の人を受け入れる場合はさらに大変である。これを解決するには、リストにしっかり受け入れ条件を明記することである。うちはタバコを吸う人はだめ、夜は静かにしてくれ、日本語を話せる人だけ受け入れ可能、などとリストに明記し、WWOOFERと受け入れ前にしっかりと話し合うことが必要である。

農家の基準に関しては、WWOOFでは有機農業の農家に限定している。有機農産物の基準に関しては農林水産省のガイドラインなどがある。また2000年夏にJAS法が改正され、有機農産物及び有機農産物加工食品の検査認証制度によって、認定登録されたものだけが「有機○○○」「オーガニック○○○」という表示が認められることになった。また、それらの食品には「有機JASマーク（図2）」をつけることができるようになった。

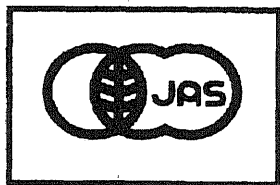


図2 有機JASマーク

これにより、「有機低農薬○○○」とか「減化学肥料無農薬○○○」というような、曖昧な表現ができなくなった。しかし現在も有機農産物や有機農家の定義は曖昧な部分もあり、海外で有機認証をうけた食品に基準値以上の残留農薬が含まれていた場合もある。また認証代が高いため、有機栽培をしても認証申請をしない農家もある。日本のWWOOFの有機農家の定義や、WWOOFでなくなってしまうが、有機農家以外にも幅広く参加してもらおう組織を作るかという議論も必要である。

また、外国人を受け入れる際にはビザの問題もある。WWOOFは営利を目的としたものではないので、観光ビザで受け入れを行っている国が多い。また、長期にわたる場合は、ワーキングホリデービザの場合が多い。WWOOFを広めていく場合は、WWOOFビザあるいはボランティアビザなどの発給の可能性も検討が必要であ

ろう。

また、日本でボランティアが根付くかという問題もある。1996年の神戸の震災や日本海重油流失事故の際は多くの人が全国から集まり助け合っていた。また最近では新潟中越地震の際にも同じように全国からボランティアの人が集まった。ここ十数年のながれをみると、日本にも充分、ボランティアのベースがあり、WWOOFも日本に認知される可能性があると考えられる。

WWOOFは単なるツーリズムとしてではなく、その土地の人と一緒に暮らしふれあいながら農作業や農村を体験する。この意義と可能性は計り知れない。そんな経験をした人たちが各方面に巣立っていく。そうした中で新しい農業の道が開けてくるのではあるまいか。WWOOFならお金をかけずに一石二鳥にも三鳥にもなる。

WWOOFは白い画用紙

本論文締切直前⁸⁾に、WWOOF日本⁹⁾を数年前にすでに立ち上げたオーストラリアの方とあうことができた。氏は1990年来日し、1994年にWWOOFの活動をはじめた。現在は札幌で日本人の奥さんと一緒に英会話学校を営みながら、WWOOF日本の本格的な始動に向けて忙しい毎日を過ごしている。出会った当日に札幌ラーメンをごちそうしてもらった。

そのラーメン屋で彼は私に「お金じゃないんです。」と言った。まさに、今の若者が求めていることではないかと思った。戦争を乗り越えて日本は有数の経済大国になった。これはまさに我々の祖父母や、父母の世代が一生懸命、日本の復興のために取り組んできたからであろう。そして今、私たちは何不自由なく暮らすことができる。しかし、経済主義、効率主義の復興過程の中で、多くのものが利他的になり、何か大切なものを失ってはいないだろうか。物質面では充実した今、成熟社会に向けて内面の充実を図る段階にきている。20世紀末の今、その過渡期の中にいる。

WWOOFは白い画用紙と同じである。農業にどう取り組むかは人それぞれでよい。大規模化を目指すもの、小規模に自給を目指すものいろいろなタイプの農家が存在している。この論文を書いている間に農業やWWOOFのことについて研究室のみんなと夜遅くまで話し合った。それぞれ考え方は違ったが、農業つまり自分たちの命の基盤をみんな真剣に考えているのは同じであった。農業にグローバルスタンダードはいらない。ただ共通するのは、農業をしながらみんな幸せに楽しく生きていこうということである。

科学者の中には、持続的な社会を作るには、循環系で再生産可能な農業を中心とした農系社会を作らないと人類は生き残れないと指摘している人もいる¹⁰⁾。21世紀は関わり方はどうあれ、皆が農業に関わっていく時代になるであろうし、そうでなければ未来の展望は暗い。海外旅行に行く人たちは小脇に「地球の歩き方¹¹⁾」をよく抱えている。WWOOFのリストを「農家の歩き方」のように小脇に抱え、多くの人が農業に関わるようになると愉快的な未来が開けてくるような気がする。

WWOOFを気軽に旅行感覚で利用する人、農業研修のために利用する人、海外生活を経験するために利用する人など、それは様々であって良いと思う。それぞれが自分の責任の中で思うように活用すればいいのだ。そうしたなかで、みんなが農業に関わっていけばきっと明るい未来が開かれてくるのではないだろうか。WWOOFはそんな機会を与えてくれる場である。農業の未来はみんなの中にある。

注および引用文献

- 1) 新村 出(編) (1969) 広辞苑. 1737p. 岩波書店
- 2) WWOOFは「自発的な有機農業の労働者達」という意味である。「ウーフ」あるいは「ウオフ」と読む。
- 3) 各国のWWOOFのホームページのURLは次の通りである。
カナダ:<http://www.woof.ca/canada/homecanada.html>
オーストラリア:<http://www.woof.com.au/>
ニュージーランド:<http://www.woof.co.nz/>
WWOOF International:<http://www.woof.org/>
- 4) 山崎光博・小山善彦・大島淳子(1993) グリーンツーリズム. 222p. 家の光協会
- 5) ワーキングホリデー制度は、特定の国と日本との相互理解や交流を深めることを目的に、日本と相手国双方の青少年が、旅行の費用を補う範囲で働くことを認める制度。2004年現在、オーストラリア、カナダ、ニュージーランド、韓国、イギリス、ドイツ、フランスとの間にこの制度がある。
- 6) 全国農業共済協会(編) (1997) 全国農業塾データブック. 262p. 家の光協会
- 7) 日本有機農業研究会マップ編集委員会(1996) 全国有機農業者マップ ～自給と提携でいのちを支え合う人びと～. 215p. 日本有機農業研究会
- 8) 1998年9月をさしている。
- 9) WWOOF日本は1994年に、オーストラリア人の

グレンバーンズ氏が北海道札幌市で始めた。取材当初は登録農家は数件であったが、2004年現在、100軒程度に達しており、北海道から九州まで全国の農家が登録している。

URL:<http://www.woofjapan.com/>

- 10) 朝日新聞社(1994) AERA-Mook4 環境学がわかる p41-p42
- 11) 「地球の歩き方」は、ダイヤモンド社が発行する海外ガイドブック。国別、地域別にまとめられ多くの海外旅行者が利用している。